

地域の魅力に気付き、伝えられるようになるための 職員向けまち歩きの手法の提案



愛知県刈谷市 林 佑実

1. テーマ設定の背景と目的

刈谷市では、市のことを「何でもあるけど、特徴が何もないまち」と話す職員が多い。そのため、全国の自治体から研修生が集まるような研修や遠方への出張の際に、市の特徴を紹介することが難しく、市の魅力を伝えられる人が少ない。

一方で、地域愛着が強い人ほど地域活動へ積極的に参加する意思が高いこと（石盛 2004）や、地域愛着が高い人ほど地域への活動に熱心であること（鈴木・藤井 2008）が明らかとなっている。今後、人口減少に伴い職員数の減少が見込まれる中で、担当業務を積極的に遂行させるためには、職員が市の様々な事業について知るだけでなく、地域を知り、地域に愛着をもつことが必要である。

これらのことから、職員が地域の魅力を発見する機会を設け、地域への愛着を醸成できるような取り組みを行っていかなければならない。

本レポートでは、地域の魅力を発見するきっかけとしてまち歩きを取り上げ、職員向けのまち歩きの手法の提案を行うことで、地域の魅力を自らの言葉で伝えられる職員が増えることを目的とする。

2. 刈谷市に関する現状

(1) 刈谷市の概要

刈谷市は愛知県の中央部に位置し、面積は 50.39 km²、市域は東西 5.8km、南北 13.2km と細長い地形をしている。市内には鉄道の駅が 9 駅あり、名古屋駅まで電車で約 20 分と、鉄道による交通の便が良い場所に位置している。

市域は北部・中部・南部の 3 つのエリアに分けられ、中部は自動車関連産業の企業や工場、歴史的史跡が多く存在し、産業や歴史の中心エリアとなっている。北部には国の天然記念物に指定されたカキツバタ群落がある小堤西池や伊勢湾岸自動車道の刈谷パーキングエリアと岩ヶ池公園を一体的に整備した刈谷ハイウェイオアシスがあり、南部には水田を中心とした農地が広がるなど、北部と南部は自然が豊かなエリアとなっている。

(2) 刈谷市の職員の特徴

刈谷市の職員の特徴として、市外在住者や市外出身者が多いことが挙げられる。図 1 の令和 7 年 4 月 1 日時点の住所別刈谷市職員の割合をみると、事務職は市内在住者が 51.1%であるのに対し、市外在住者は 48.9%と、約半数が市外在住である。また、土木技

術職・建築技術職・電気技術職を合わせた技術系職員では、市内在住者が 31.4%、市外在住者が 68.6%と、市外在住者が約 7 割を占めている。

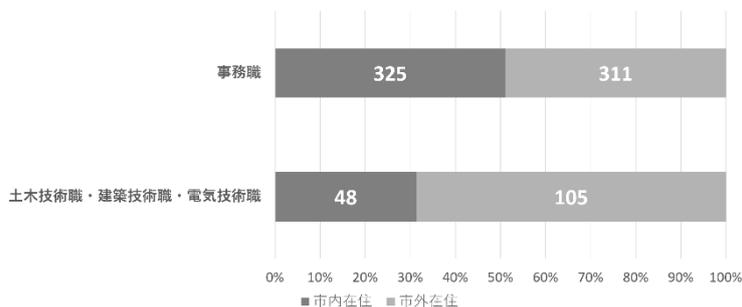


図 1 住所地別刈谷市職員の割合
(人事課資料より筆者作成)

図 2 は、令和 7 年 4 月 1 日時点の事務職員の住所地別分布図である。刈谷市に隣接する市や町を中心に、鉄道での通勤が可能な名古屋市や尾張地方に住んでいる職員もおり、刈谷市が生活圏域に入っていない職員が一定数いることが分かる。

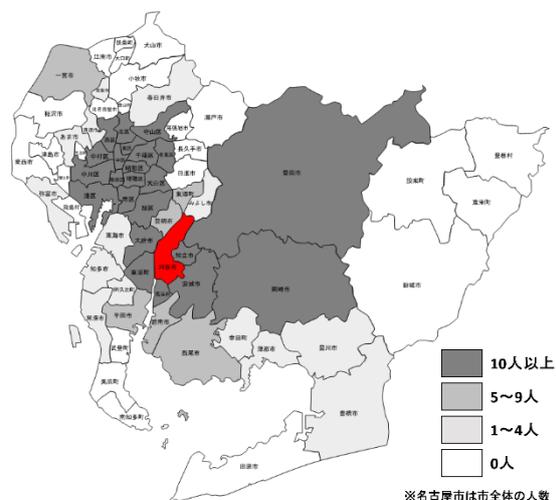


図 2 刈谷市事務職員の住所地別分布図
(人事課資料より筆者作成)

さらに、令和 7 年度に入庁した事務職員 18 人のうち、中学・高校・大学のいずれかで市内の学校に通っていたことがある人は 13 人で、新規採用職員のうち 5 人が市外出身で、刈谷市にゆかりがない状態で入庁している状況にある。

これらの背景には、交通の便が良いこと、地域手当が県内の他市町村と比較して高く設定されていること、市内の教育大学を卒業した公務員志望の学生が市役所に就職することが理由として挙げられる。

市外出身の職員は採用試験対策で市について調べたり、市内をまわったりするものの、そこで得られる情報には限界があり、刈谷市で生まれ育った職員ほど市について詳しくない状態で入庁し、業務にあたっている。

市外出身の若手職員に業務における困りごとを尋ねたところ、「コロナのワクチンが打てる最寄りの病院を教えてほしいという問い合わせに対し、地図がないと場所を把握できず、スムーズに案内できなかった」「季節の花やフォトスポット、地域で行われる行事などの情報が少なく、取材先の候補として挙げられる場所が限られてしまった」という回答を得た。市外出身であるがゆえに、土地勘や地域の情報がなくて業務中に困りごとを感じており、業務効率にも差が出てしまっていることがうかがえる。

(3) 刈谷市の職員の市への愛着

図 3 の令和 6 年度「人材育成基本方針に係る職員アンケート」によると、「刈谷市に愛着がある」職員の割合は、「そう思う」が 38.3%、「どちらかと言えばそう思う」が 43.5%、「どちらとも言えない」が 15.2%、「どちらかと言えばそう思わない」が 1.6%、「そう思わない」が 1.4%となり、約 8 割の職員が市に愛着をもっていることが分かる。一方で、「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」を合わせた市

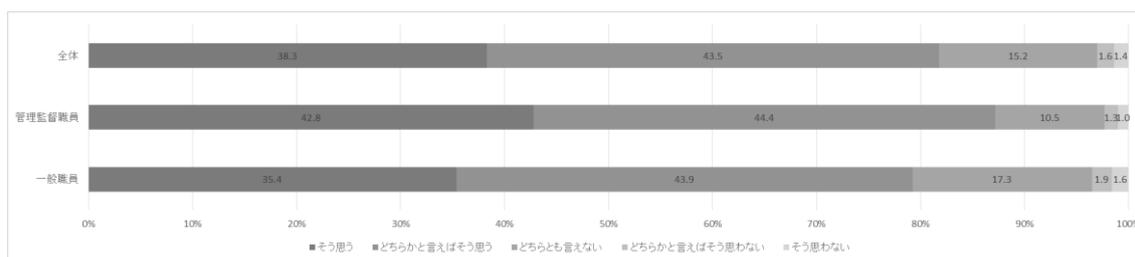


図 3 刈谷市に愛着がある職員の割合

(令和 6 年度「人材育成基本方針に係る職員アンケート」より筆者作成)

への愛着があるとは言えない職員の割合を役職別に見てみると、係長以上の管理監督職員は 12.8%であるのに対し、一般職員は 20.8%と 2 割を超え、人数にして 144 人の一般職員が市への愛着があるとは言えないまま業務にあたっている。この結果から、一般職員は管理監督職員と比較して市への愛着が低いため、特に若手職員に対して市への愛着を醸成するための取り組みが必要であることが示唆される。

また、市の魅力について尋ねると、多くの職員が「財政が豊か」と答える。自動車関連産業を中心とした多くの企業や工場が立地する刈谷市は、企業城下町として発展しており財政力指数が高いのは事実であるが、財政が豊かなことで何が魅力的なのかを具体的に理解して説明できる職員は少ない。さらに、「市の魅力＝財政が豊か」を挙げるに留まり、財政力以外の魅力に目を向けることができず、市への愛着はあっても具体的な魅力を伝えることができない職員が多いと感じる。

3. 地域愛着を醸成する「まち歩き」

地域愛着を醸成する手法の一つとして、まち歩きが挙げられる。長野県小布施町のまち歩きガイドの視察では、歴史的建造物や観光スポットを見たり、路地に足を踏み入れたり、特産物を食べたりしながら、ガイドとともに約 1 時間まちを歩いてまわった。短時間のまち歩きの実践であったが、まちについて深く知り、魅力に気付くことで地域への愛着が育まれたと感じ、地域愛着を醸成する手法としてまち歩きが効果的であることを実感した体験となった。



写真 1 小布施まち歩きガイドによるまち歩き

また、職員がまち歩きを行うことの効果として、市外出身者は土地勘や地域の情報を得られて業務効率が向上すること、市内出身者はまちの中に存在する当たり前になってしまっているものの価値を見出し、活用につなげられることが挙げられる。

以上のことから、数多く存在する地域愛着を醸成する手法の中から、本レポートではまち歩きに焦点を当てて、職員向けまち歩きの手法について検討を進めることとする。

4. 「刈谷を巡るモデルコース」の体験に基づく分析

職員向けまち歩きの手法を検討するにあたり、まずは刈谷市観光協会が作成している

「刈谷を巡るモデルコース」を参考に、どのような場所が市の観光資源として取り上げられているのか、どのような方法やルートで巡るコースが設定されているのかについて分析を行う。設定された 11 のモデルコースを実際に体験し、その中から徒歩 2 コース、自転車 1 コース、自動車 1 コースについて評価できる点と改善すべき点や、交通手段の違いによる効果を整理していく。

(1) どうする家康 家康の母於大と水野家ゆかりの地をめぐるコース【徒歩】

徳川家康の生母「於大の方」と、水野信元をはじめとした水野家のゆかりの地を巡るコース。

JR 逢妻駅→徒歩 12 分→刈谷市歴史博物館→徒歩 3 分
 →亀城公園→徒歩 5 分→椎の木屋敷跡→徒歩 22 分
 →楞嚴寺→徒歩 15 分→御菓子処 吉野屋→徒歩 5 分
 →名鉄刈谷市駅

このコースでは、歴史を感じられる史跡を中心に、中部エリアを巡るルートが設定されている。中でも、刈谷市歴史博物館は職員向けのまち歩きでもルートに入れておきたいスポットの一つである。刈谷市歴史博物館では、刈谷が大きく発展した「縄文時代」「刈谷藩と城下町（戦国・江戸時代）」「刈谷発の近代化（明治～昭和時代）」の 3 つの時代や、「万燈祭」「野田雨乞笠おどり」「大名行列」という歴史ある 3 つのお祭りについて学べるテーマ展示が行われている。刈谷の発展の歴史と伝統ある祭り文化を学ぶことができる施設として、職員が刈谷市歴史博物館を訪れる価値は大きいと感じた。



図 4 ルートマップ

また、亀城公園や名鉄刈谷市駅には、市が行う事業を紹介する看板が設置されており、他の課が行う事業について知るきっかけとなった。



写真 2 亀城公園に設置されている市の事業を紹介する看板

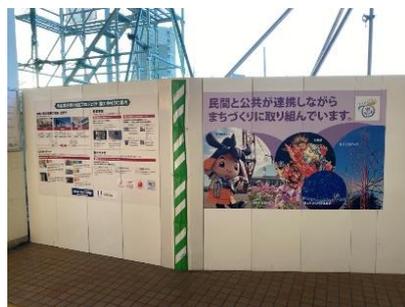


写真 3 名鉄刈谷市駅に設置されている市の事業を紹介する看板

各スポット間の移動距離について考えてみると、椎の木屋敷跡から楞嚴寺までが徒歩 22 分と最も長く設定されていた。楞嚴寺は、水野家の菩提寺で「於大の方」にもゆかりがあ

るため、コースのテーマには合っているが、歴史に関心がない人には一般的なお寺と変わらない印象を受けた。長い移動距離に対して訪れたスポットの見応えが少ないと、その場所はがっかりスポットになりかねない。職員向けまち歩きでは、職員として身に付けておくべき市の歴史や文化などの情報を得られるスポットをメインに置きつつ、スポット間の移動は長くても徒歩 15~20 分ほどになるように、移動距離と各スポットで得られる情報量のバランスを考えて設定する必要があると考えた。

(2) レトロとモダンのまち 名鉄刈谷市駅周辺を散策【徒歩】

かつて刈谷の繁華街だった名残があり、街並みや建物からレトロな雰囲気が感じられる名鉄刈谷市駅周辺。リノベーションされたカフェやショップもあり、レトロとモダンを楽しめるコース。

名鉄刈谷市駅→徒歩 2 分→NOBI COFFEE ROASTERS→徒歩 2 分→刈谷日劇→徒歩 1 分
→御菓子所 みず乃→徒歩 14 分→市原稲荷神社→徒歩 18 分→名鉄刈谷市駅

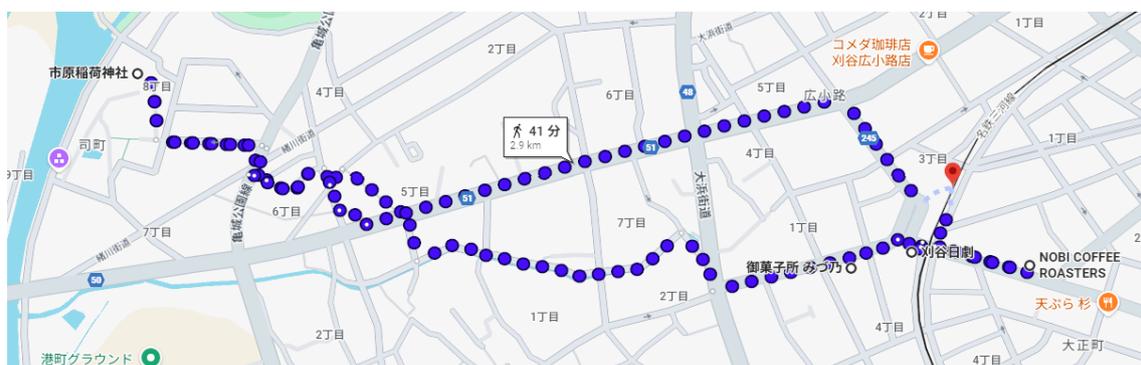


図 5 ルートマップ

このコースでは、モダンな雰囲気を感じられる名鉄刈谷市駅周辺を中心に、中部エリアを巡るルートが設定されている。中でも、御菓子所 みず乃と名鉄刈谷市駅周辺のモダンな街並みを職員向けまち歩きのルートに入れておきたいと感じた。御菓子所 みず乃では、刈谷城や市のマスコットキャラクター「かつなりくん」をあしらったお菓子や、名産の切り干し大根を使ったおかきなどを販売している。出張の際にこれらを手土産として持っていけば、刈谷の歴史や特産物を紹介するきっかけにもできる。また、名鉄刈谷市駅周辺は、モダンな雰囲気の建物が並び、このエリアが栄えていた当時の様子を知ることができる場所である。しかし、今後、再開発が予定され、モダンな街並みを見ることができる期間は限られている。刈谷の発展の歴史を感じられる場所として、今のうちに訪れておくべきスポットとして挙げておきたい。



写真 4 名鉄刈谷市駅周辺のモダンな街並み

(1) のコースと比較すると、(2) は全体的にスポットが近くにまとまっており、まち歩きとしては移動距離や移動時間がちょうどよく設定されたコースであると感じた。

徒歩の 2 コースを巡ってみると、進む速度がゆっくりであるため移動している間にも周辺の様々なものが目に留まり、設定されたスポット以外にも史跡やパン屋などに立ち寄ることがあった。徒歩でまちを巡ると、気になった場所やお店、道に合わせてルートを自由に変更しやすく、立ち寄りやすいこと、車では通ることを躊躇われるような裏道や入り組んだ細い道を通ることも容易で、知らない道を選んで通ることによる冒険のようなワクワク感が感じられるといったメリットがあり、普段、自動車を通る際には気にも留めないような場所や地域の様子を詳しく知ることができた。

一方で、課題点としては、訪れた場所について、設置されている看板やホームページなどから得た情報から理解することしかできず、まちの理解度は低くなってしまおうということが挙げられる。小布施のまち歩きガイドのように、その場所に詳しい人から直接話を聞く機会を設けることが、短い時間でも効果的なまち歩きを行うにあたって必要なことであると考えた。

(3) 大人の社会見学 車のまち 刈谷のテクノロジーをのぞいてみよう！【自転車】

自動車関連産業が集積する刈谷市で、トヨタ自動車の「クルマづくりの出発の地」から最先端のテクノロジーまで企業の見学施設を巡るコース。

刈谷駅前観光案内所 → 自転車 7 分 → トヨタ創業期試作工場 → 自転車 7 分
 → Thankful days coffee → 自転車 2 分 → デンソーミュージアム → 自転車 7 分
 → アイシン コムセンター → 自転車 7 分 → 刈谷駅前観光案内所

このコースでは、中部エリアに点在する自動車関連産業の企業の見学施設を巡るルートが設定されている。刈谷駅前観光案内所では、市内の観光スポットやイベントなどの情報を得ることができ、自動車関連産業の企業の見学施設では、市を代表する産業の最先端技術を知ることができた。



図 6 ルートマップ

自転車でコースを巡ってみると、徒歩に比べて移動中に目に留まる対象物が大きくなり、立ち止まる回数も減った。その要因として、進む速度が速くなり対象物を気に留める時間が短くなったことや、徒歩に比べて裏道を通ることが減り、車で通る時と同じ情報量であったことが挙げられる。また、コースを一緒に巡る人がいた場合、徒歩や車に比べて移動中に気になったものを共有することが難しいというデメリットが挙げられた。

(4) 楽しく学んで遊ぼう！【自動車】

科学や歴史を学び、市内の主要な公園で遊べるコース。

夢と学びの科学体験館・交通児童遊園→自動車 3 分→ミササガパーク→自動車 3 分
→フローラルガーデンよさみ→自動車 10 分→刈谷市歴史博物館→自動車 3 分
→郷土資料館→自動車 25 分→刈谷ハイウェイオアシス・岩ヶ池公園

このコースでは、刈谷市を代表する観光スポットである北部の刈谷ハイウェイオアシスから南部のミササガパークやフローラルガーデンよさみまで、市内全域をまわることができた。

自動車でコースを巡ってみると、設定されたスポットをまわるのみで、他の場所に立ち寄ることはなかった。徒歩や自転車に比べて進む速度が速くなり対象物が目に留まりにくくなったことと、車で立ち寄ることのハードルが高いことが要因として挙げられる。



図 7 ルートマップ

しかし、スポットが広範囲に点在している北部や南部エリアにおいては、スポットや目的に合わせてルートを設定しやすく、効率よく広いエリアをまわることができるという点で最適な方法であると考えられる。

(5) モデルコース巡りからみえた課題

以上のモデルコース巡りを通してみえてきた課題の整理を行う。まず、現状の課題として、職員がまちを巡る機会が圧倒的に不足し、まちの魅力となる要素に気付いていないことが挙げられる。今回は市を代表する場所が設定されたモデルコースを巡ったが、中には筆者にとっても初めて訪れる場所やお店があった。様々な場所を訪れる中で、刈谷市にも歴史や文化が色濃く残っていることを体感し、市の特徴や魅力として紹介できるものが何もないのではなく、市の魅力になり得る要素を把握できていないだけだと感じた。その背景には、職員がまちを巡って観察し、まちを知る機会が不足しているという現状の課題がうかがえる。

また、自転車や自動車モデルコースを巡った際には、スポット間の移動中に他の場所に目が留まることが少なく、北部や南部エリアでは巡った場所をスポット的に点で捉えるに留まってしまった。地域を深く理解するためには、徒歩で巡った中部エリアのように各スポットをつなぐルートが線になり、複数のルートがつながって面となるように地域を捉える必要がある。業務中の移動には自動車を利用することがほとんどであるが、効果的にまちを理解するためには、あえて歩いてまちを巡る機会を設ける必要があると考えられる。

次に、「刈谷を巡るモデルコース」を職員向けに行った場合の課題として、地域の人と

の関わりが少なく、まちの魅力に気付く機会が不足していることと、気付いた魅力をアウトプットする機会がないことの 2 点が挙げられる。モデルコース巡りでは、その地域に暮らす人など、訪れた場所に詳しい人の話を聞くことができなかった。看板などから得られる情報から気付けるまちの魅力は限られていたため、地域の人から好きな場所やもの、そのエリアの特徴などの話を聞く機会を設けられると魅力に気付きやすくなると考えられる。また、モデルコースを巡るだけで、気付いた魅力を他の人に伝える機会がないため、「何となくいい場所・もの」という印象だけが残し、具体的にどのような点が魅力的なのかを言語化できないまま終わってしまう。市の魅力を発信できる職員になるために、まち歩きを通して気付いた魅力を言葉にして人に伝える機会を設ける必要がある。

5. 職員向けまち歩きの手法の提案

モデルコース巡りからみえた課題の解決策として、職員向けまち歩きに地域の人の話を聞く機会を設けることや、気付いた魅力を他の人に伝える機会を設けることが挙げられる。これらの点を踏まえて、第 1 回職員向けまち歩きの流れを以下の通り提案する。

①少人数のグループでまちを歩き、各自で魅力的に感じる場所やものを見つける

▶グループ構成：出身や所属部署が異なる 3～4 人

▶ルート：刈谷市歴史博物館→徒歩 18 分
 →御菓子所 みず乃→徒歩 2 分
 →名鉄刈谷市駅周辺（約 2 時間）

※ルートの周辺にあるメンバーの担当業務に関する場所や市内出身者の思い出のある場所にも立ち寄る。

※第 2 回以降は前回までに見つけた場所やものをスポットとして増やしていき、複数あるスポットからメンバーの興味や関心に合わせて自由に選んでまわる。

▶地域の人の話を聞く機会：あらかじめ設定したスポットにはその場所に詳しい人を配置し、15～30 分ほど話を聞く。

- ・刈谷市歴史博物館…学芸員や地域の歴史好きな人から地域の歴史について聞く
- ・御菓子所 みず乃…店主から地域の特産物や銘菓の開発秘話を聞く
- ・名鉄刈谷市駅周辺…市の担当職員から再開発の背景や状況を聞く

その場所に詳しい人から話を聞くことで、その場所への理解が深まるだけでなく、人との交流を通して魅力に気付きやすくなるという効果も期待できる。



図 8 ルートマップ

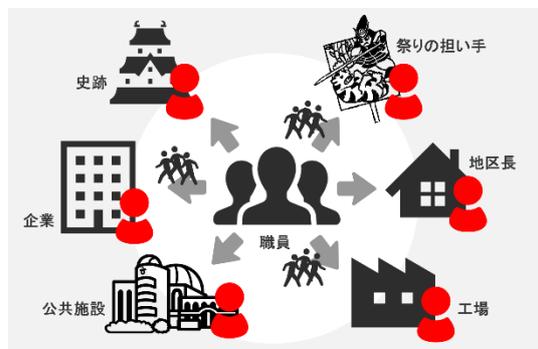


図 9 地域の人の話を聞く機会のイメージ

他にも、設定するスポットに合わせて、祭りの担い手から祭り文化について聞く、地区長から地区が抱えている課題を聞く、市内の企業の従業員から産業の特徴について聞くなど、市民から意見を聞き取り、市政に反映させる場所として活用することもできる。

さらに、訪れるスポットに公共施設やまちづくり事業が行われている場所などを設定し、担当職員から説明を受けられるようにすることで、他の課が行う市の事業の概要や背景などを職員目線で理解でき、業務に有益な職員向けまち歩きにすることができると考える。

②各自が魅力的に感じた場所を紹介し、グループで市の魅力&事業紹介マップを作る

▶まち歩きで気付いた魅力をグループで紹介する (30分)

このワークでは、まち歩き中に気付いた魅力を歩いたルートに沿ってグループで挙げていく。グループのメンバーに紹介する際は、魅力的に感じた場所やもの自体だけでなく、どのような点を魅力的に感じたのかを具体的に説明する。紹介する側は自身の「何となく魅力的に感じる」という感覚を言語化して相手に伝える練習になる。また、グループのメンバーにもその場所やものを魅力的に感じてもらえるように詳しく調べたり、伝え方を工夫したりするなど、紹介したい場所についての理解が進み、人に勧めたことで愛着も醸成されると考えられる。一方で、紹介された側は、他のメンバーが魅力的に感じた場所を知ること、同じ場所を訪れていても気付くことができなかった魅力に気付けるようになり、今までになかった視点からさらに多くのまちの魅力を知ることができる。

▶市の魅力&事業紹介マップを作成する (30分)

魅力的に感じた場所やもの、担当業務に関する場所をルートマップに書き入れていき、グループで見つけた市の魅力&事業紹介マップを作成する。その後、作成したマップを見ながら複数のメンバーが魅力的に感じた場所やものはあるか、観光スポットやお出かけスポットとして発掘されていない場所やものなどの新たな視点はあるかなど、感じたことをグループで話し合う。

③グループのまち歩きコースを作成する

▶グループのまち歩きコースを作成する (1時間)

②で作成した市の魅力&事業紹介マップを元に、他のグループにも紹介したい場所を 3~4カ所選び、それらを巡る約 2 時間のまち歩きコースを作成する。グループごとにテーマを設定し、テーマに合った各スポット間の移動が長くても徒歩 15~20 分になるようなルートを考える。

▶特化型まち歩きコースの作成

グループに居住歴や在籍年数が長い職員がいる場合、その職員が過ごしてきた場所や所属部署、担当業務に焦点を当てて「〇〇さんのまち歩き」としてルートを設定すれば、その職員ならではのコースができる。さらに、事業部などで「〇〇課のまち歩き」としてその課が担当する事業が行われている場所を担当職員とともに巡るルートを設定すれば、異動してきた職員はその課が行う事業の背景や進捗状況を現場で学ぶ機会となる。また、「〇〇課のまち歩き」マップがあれば、全く関係のない課にいる職員も、その課が行う市

